幼児教育と小学校教育との円滑な接続に向けて

～幼児期の遊びを通した主体的・対話的で深い学びを小学校での学びにつなぐ～

幼児期から児童期へ子どもの発達や学びは連続しています。そのため、幼児教育と小学校教育で育成を目指す資質・能力が一貫して育まれるように、幼児教育と小学校教育の円滑な接続を図る必要があります。そして、それぞれの時期の発達の特性から教育内容や方法の違いはあれども、双方の教育において「主体的・対話的で深い学び」を重視していることは同じです。こうした共通の視点から、子どもの発達や学びの姿への認識を深め、理解し合い、一貫した質の高い教育を目指すことが求められます。このリーフレットがその一助となり、実践に活用していただけることを願います。

学びをつなぐ！

このリーフレットでは、幼児期の自発的な活動としての遊びを通して育まれる学びとはどのようなことか、その指導の際、教師は何を大事にしているか、さらに、その学びが小学校における各教科等の学習にどのようにつながるのかを事例を通して示しています。

名古屋市教育委員会　指導部指導室　幼児教育支援室　令和５年２月

遊びや生活を通して総合的に学ぶ幼児教育

「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」平成２８年１２月２１日 中央教育審議会より引用

「主体的な学び」	周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しを持って粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる学び
「対話的な学び」	他者との関わりを深める中で、自分の思いや考えを表現し、伝え合ったり、考えを出し合ったり、協力したりして自らの考えを広げ深める学び
「深い学び」	直接的・具体的な体験の中で、「見方・考え方」を働かせて対象と関わって心を動かし、幼児なりのやり方やペースで試行錯誤を繰り返し、生活を意味あるものとして捉える学び

幼児期の「遊びを通した学び」とは・・・

小学校の教師

「遊び」って、ただ遊んでいるだけではないのですか？

いえいえ、幼児は自分の思いを言葉や行動で表し、発想を生かして実現しようとする過程で、様々な「学び」を得ています。その「学び」を支えるのが私たち教師の役目です。

幼児教育関係者

コロナ禍の夏休み中の５歳児

２学期「夏祭り」の準備の様子

幼児のしたいことができるように材料を準備しておこう。

いよいよ「夏祭り」本番・・・

【自分たちもお店を出して楽しむ年中児】

思いや願いをもつ
↓
思いや考えを出し合う
↓
試したり工夫したりする
↓
思いを実現する
↓
振り返る

小学校の教師

教師は、幼児の自発的な活動である「遊び」を通して育まれている「学び」を的確に捉え、さらに発達に必要な体験となるように様々な環境の構成をしたり、援助をしたりしているんですね。詳しくは、実践事例を読んでみますね。

☆ 活動は違いますが、幼児教育も

教科等の学習内容を系統的に学ぶ小学校教育

「小学校学習指導要領（平成２９年告示）解説
総則編」平成２９年７月文部科学省より引用

「主体的な学び」	学ぶことに興味や関心を持ち、自己のキャリア形成の方向性と関連付けながら、見通しをもって粘り強く取り組み、自己の学習活動を振り返って次につなげる学び
「対話的な学び」	子供同士の協働、教職員や地域の人との対話、先哲の考え方を手掛かりに考えること等を通じ、自己の考えを広げ深める学び
「深い学び」	習得・活用・探究という学びの過程の中で、各教科等の特質に応じた「見方・考え方」を働かせながら、知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したり、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう学び

小学校における「なかまなビジョン」の取り組みとは…

名古屋市は、「なかま」との対話を大切にした、主体的な「学び」を目指し、どのような力を付けるのかといった授業に「ビジョン」をもつことを重視した授業改善を進めています。生活科での授業改善のポイントは、「幼児期の教育との連携や接続を意識したり、他教科との関連についてカリキュラム・マネジメントの視点から検討したりして、スタートカリキュラムを作成し、より自覚的な学びに円滑に移行できるようにする」です。

小学校の教師

単元の流れ

めあてをつかむ

▶ 単元のゴールに「○○をしよう」という具体的な思いや願いをもつことができるようにします。

やさいパーティーを開こう。

いろいろなおもちゃでみんなで遊ぼう。

自分の考えをもつ

▶ 「見付ける」「比べる」「たとえる」「試す」といった直接的な活動を中心に、対象に十分関わり、自分の思いや願いを実現するための考えをもつことができるようにします。

水と一緒に肥料もやると、やさいさんが元気になるよ。

紙とんぼの羽根の曲げ方を変えると、高く飛んだよ。

なかまと対話する

▶ ペアや少人数(３～４人)で考えを聞き合い、自分の考えをより良くしたり、確かなものにしたりすることができるようにします。
▶ 「自分の考えをもつ」と「なかまと対話する」を複数回設定します。

○○さんと話したら、水をやりすぎていたことが分かったよ。これからは少しにしよう。

羽根がやわらかすぎたから飛ばなかったんだね。○○さんみたいに、かたい羽根にしてみよう。

まとめる

▶ 思いや願いを実現させた後、この単元でできるようになったことを表現することができるようにします。

みんなでやさいパーティーができたよ。自分たちで育てたから、苦手なピーマンも食べたよ。

自分で紙とんぼが作れたし、ほかけ車も作れるようになったよ。

振り返る

▶ 学習したことを基に、新たな思いや願いをもち、次の活動につなげることができるようにします。

次は、秋からショウガツナを育てて、お雑煮パーティーをしたいな。

作ったおもちゃで幼稚園の子と遊ぼうよ。

「なかまなビジョンアラカルト　生活科」
平成２９年２月名古屋市教育委員会より引用

小学校教育も主体的・対話的で深い学びを大切にしています。

実践事例　５歳児６月上旬　「ありがとうのとう、とうやのとうだ」
～偶然の気付きに、書きたい気持ちがふくらんでいく幼児の姿～

５月、母の日のプレゼントを作った際、幼児は、教師が印刷した「ありがとうの手紙」に色をぬったり、伝えたい思いを教師に代筆してもらったり、自分の名前や文字（のようなもの）を書いたりした。

この時期の とうや は、絵本の文字を拾い読みしたり、自分の作ったものに名前を書こうとしたり、文字への関心が出てきていた。母の日の手紙では自分の名前の「と」の字が鏡文字になりながらも、何度も消しては書き直し、自分で名前を書こうとしていた。この手紙を母親は、大変喜んで受け取った。

【ねらい】　自分の思いや考えを、互いに出し合いながら友達と遊ぶ楽しさを味わう。

【環境の構成】　友達の影響を受けながら自分の思いやイメージを様々な方法で表現できるような材料や用具を用意する。（母の日の手紙を書いた姿から、文字への関心が生かせるような手紙の用紙など）

幼児の姿と教師の援助　ポイントとなる幼児の言動	幼児の姿をどう捉えるか（遊びを通した学び）
【父の日のプレゼントを作る場面で】 プレゼントができあがると、幼児の中から、「手紙も書きたい」という声があがった。 この姿を捉え、以下のような手紙の用紙を用意した。	・「手紙も」の「も」に、母の日に手紙を書いたことを思い出したことがうかがえる。「感謝の気持ちを伝えたい」という湧き出した思いから、手紙を書こうとしている。 道 言 数 健 社
学級の全ての幼児が文字を書ける発達の段階ではない。そこで、あらかじめ「おとうさん いつもありがとう」の文字は印刷し、絵、文字、自分の名前などが自由にかけるスペースをつくった。 	自分で名前を書いてみたい幼児には、教師が別の紙に文字の見本を用意したり、分からない文字だけ代筆したりして、個々の幼児の発達の段階、興味や関心に応じて、この手紙を活用できるようにした。
とうや「お・と・う・さ・ん・い・つ・も・あ・り・が・と・う。ありがとうのとう、とうやのとうだ」 教　師「本当だ。一緒だね」 とうや「これ見て書くと（自分の名前）間違えないね」 教　師「そっか。そうだね。見て書いたらきっと間違えないよ」と とうや の言葉を繰り返して言うと、書こうとし始めた。	・拾い読みをしたら、偶然、音が自分の名前の音と同じであることを発見し、うれしくてたまらないようである。 ・「本当だ。一緒だね」という教師の言葉から、自分の発見に確信をもち、音が同じならば文字も同じと感じたのだろう。 ・見て書くことで、間違いなく文字が書けるという見通しをもったのだろう。 感 思 自 数
とうや は手紙に自分の名前を書くと同じ名前のもう一人の とうや に対して、「ありがとうの『とう』が、とうや の『とう』と一緒だから、見て書くといいよって教えてあげようよ」と教師に言った。	・同じ名前の幼児へも関連することと感じ、この発見を知らせたいという気持ちを強くしている。 協 道
もう一人の とうや を呼んでくると、手紙を見せながら、勢いよく説明をした。 そして、もう一人の とうや が名前を書くまでずっとそばで見守っていた。	・勢いよく説明する姿に、早くこの発見を共有したいという気持ちや自信が感じられる。また、最後まで見届けようとする気持ちが感じられる。 協 数

＜幼児期の終わりまでに育ってほしい姿＞　健 健康な心と体　自 自立心　協 協同性
道 道徳性・規範意識の芽生え　社 社会生活との関わり　思 思考力の芽生え　生 自然との関わり・生命尊重
数 数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚　言 言葉による伝え合い　感 豊かな感性と表現

遊びを通した学びが深まるようにする指導のポイント

ポイント１　伝えたい気持ちが湧き出すような状況づくりをする

「～したい」という気持ちが行動の原動力になる。日々の園生活の中で幼児が感じたことや表したことの意味や価値を理解して共感し、「分かってもらううれしさ」「伝わるうれしさ」を味わう経験を重ね、伝えたい気持ちが湧き出てくるような状況や機会、雰囲気づくりをする。

ポイント２　幼児の気付きを見逃さずに、発達の姿を生かす教材を工夫する

幼児が文字と出会う過程、その中での偶然の発見や気付きなどを見逃さず、次への体験に生かせるような教材等を工夫する。

ポイント３　必要感から文字を書きたくなるタイミングを大事にする

「手紙で伝えたい」という必要感から、プレゼントの手紙を書きたいと思い付いたり、「メッセージの文字を見たら間違えずに書ける」という自分の気付きを試してみたくなったりするなど、幼児が文字を書きたくなるタイミングを見計らって文字と出会う環境をつくるようにする。

幼児は文字の機能や役割を体験から感じ、読んだり書いたりすることに憧れ、遊びや生活に取り入れていきます。

鏡文字や文字らしき表記などであっても、幼児期には、文字と出会った感動、「読んでみたい」「書きたい」気持ちを、まず、大切に受け止めていきます。

主体的・対話的で深い学び

○　感謝の気持ちを伝えたいという必要感から、これまでの体験の中で出会ってきた文字を「読みたい」「書きたい」と感じ、行動に表そうとしている。

○　声に出して読み上げたことで、偶然、音と文字との関連性を発見し、同じ音ならば文字も同じことに気付き、文字が分かる喜びを感じている。母の日に苦労して書いた体験から、見て書くとよいことにも気付いていく。

○　同じ音の名前の幼児の存在にも気付き、自分の発見が同じように生かせると考え、すぐに知らせたり、友達の姿を見届けたりする。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

小学校の学習にどのようにつながるのか　～国語科・生活科への接続例～

学習指導要領［国語科］の内容への接続例

＜単元名　わたしの　なまえ（１年）＞

（単元のめあて）

挿絵を基に、話し方や聞き方について知り、自分の名前や自分のことをカードに書き、友達に知らせるようにする。

（目指す子どもの姿）

・音節と文字の関係、アクセントによる語の意味の違いなどに気付き、姿勢や口形、発音や発声に注意して話している。知識及び技能※

【市教育課程　国語科(１年)Ｐ８より】

数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚

市教育課程［生活科］「スタートカリキュラム」を基にした国語科への接続例

（実践例）

「ともだちのことしりたいな」

・自分の名前と好きなものをかいたカードにサインをもらいながら、仲間づくりを行うことができるようにする。

新しい友達と仲良くなりたいな。

【市教育課程　生活科(１年)Ｐ５より】

※　知識及び技能は、国語科の評価の観点です。国語の評価の観点には、「知識及び技能」、「思考力･判断力･表現力等」（「話すこと･聞くこと」、「書くこと」、「読むこと」）、「主体的に学習に取り組む態度」があります。

実践事例　５歳児1月下旬　　忍者の劇「シューっていかなくちゃ！」
～考えを出し合いながら 劇をつくりあげていく幼児の姿～

１学期から、忍者という共通のイメージをもって、友達と一緒に夢中になって遊んだA児たち。遊ぶ中で、友達とイメージや考えを出し合ったり、受け入れ合ったりして遊ぶ楽しさを味わった。遊びに必要なものも、友達と相談して、身近な材料や遊具を使って試行錯誤しながらつくり、イメージを実現していく面白さも味わった。このような経験の積み重ねから、３学期の生活発表会では、幼児から「忍者の劇をしたい」と声があがり、「師匠からもらった地図を手掛かりに、宝を探しに行く」というあらすじになっていった。

【ね　ら　い】　共通の目的に向かい、友達と相談したり、協力したりしながら自分たちで遊びを進め、達成感を味わう。

【環境の構成】　自分の思いや考えを出し合えるような場や時間、雰囲気をつくり、幼児が工夫しながら実現できるような状況をつくる。

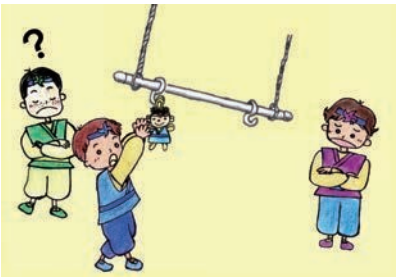
幼児の姿と教師の援助　　ポイントとなる幼児の言動

様々な試練を忍者の術で乗り越えていくことになり、崖の向こう側に渡るためにはどうするかということで相談が始まった。

A児「ターザンの術にしよう」
B児「ターザンの術だから、シューっていかなくちゃ」
C児「天井にひもを付けるのは？」
D児「それにぶら下がるの？」
E児「壊れちゃう！」など、それぞれが考えを出し合った。

しばらくして、周りを見回していたA児が、天井にぶら下がったさおを見付け、「あれに人形を付けるのはどう？」と言った。そのアイデアに友達も賛成し、教師に「あの棒下げて！」と言いに来た。

教師がさおを下げると、幼児は思い切り押したり、斜めに傾けたりしたが、なかなかうまくいかなかった。教師は、仲間の一員として使えそうな物を一緒に探したり、S字フックやリング等を「こんなのどう？」と見せたりした。幼児も「これでやってみよう」と思い付いたことを次々と試していった。



そのうちに、B児が「あれはどう？」と、カーテンレールを見付けた。幼児たちはカーテンレールを付けたさおに人形を付け、勢いよく動かしたり角度を変えたりしながら試した。

そして、「行け！」という掛け声とともに、人形がスムーズにレールの端まで到着すると、全員で「やったあ！」と大喜びした。

幼児の姿をどう捉えるか（遊びを通した学び）

幼児一人一人が、思いや考えを自分なりに伝え、考えを出し合えるよう、教師も仲間の一員となって参加した。

・したいこと、目的をはっきりともっている。
・ターザンの動きをイメージし、擬音にして表現しようとする。
・友達の言葉や擬音から、友達のイメージを想像しようとする。
・友達同士で、自分なりに考えたことを言葉にして伝えようとする。
感 自 言 協

・実現しようと、周りの環境から必要なものを探そうとする。
思 自

・イメージ通りにいかないため、身近な環境から、よりぴったり合うものや動かし方を見付け出そうとする。
・一緒に考えてくれる教師の言葉や動きに関心をもち、真剣に見たり聞いたりして試そうとしている。
思 言

・カーテンレールの仕組みを思い出し、動きを予想してみようとする。
・傾斜の角度や動かす速さを変えて、人形の動きを工夫し、いろいろと挑戦してみようとする。
社 思 数

・人形の動きに自分を同化させて、自分が行ったかのように喜ぶ。
・粘り強く考えたことが、イメージ通りになり、満足感・達成感を味わっている。
協 自

遊びを通した学びが深まるようにする指導のポイント

ポイント１　自分たちで劇をつくっていく楽しさを味わえるようにする

「忍者の劇がしたい」という思いが出発点である。劇のストーリーづくりや、表現方法も自分たちで考えを出し合って決めていけるようにする。教師が決めたことを教えられたように取り組むのではなく、自分たちでしたいことに向かっていろいろと考えを出し合い、実現する楽しさを味わうことを大切にする。

ポイント２　友達との話し合いの中で、気付き、考えられるようにする

これまでの体験の中で、受け入れ合える友達同士の関係が必要である。ターザンの術を表現するための話し合いでは、教師も仲間の一員として参加する中で、一人一人が思いや考えを自分なりの言葉にして伝えようとしている。友達と考えを出し合う中で、幼児が友達の考えに触れ、自分の考えと比べたり関連付けたりして、新たな考えを生み出そうとする姿を大切にする。

ポイント３　目的に向かって友達と試行錯誤し、共につくり上げられるようにする

ターザンの術を表現しようとするが、なかなかうまくいかない。葛藤やトラブルの過程も重要な体験と捉え、幼児の考える時間と場を保障し、見守るようにする。その中で、幼児が自ら周りの環境に目を向け情報を活用し、考え、試行錯誤し、行動することを大切にする。

主体的・対話的で深い学び

○　イメージしたことを適切な言葉や擬音等で表現し伝えようとしたり、それらを聞きイメージを推測したりする。（互いの思いや考えを受け止め合う）
○　イメージの実現に向け、必要なものを身近な環境から探そうとしたり、よりぴったり合うものを見付けようとしたりする。
○　物の仕組みを捉え、角度と速さの関連性などに気付いたり、特性を遊びに取り入れたりする。
○　自分たちで主体的に取り組んだことに、最後まで粘り強く考えたり、やり遂げたりする。

【幼児期の終わりまでに育ってほしい姿】

小学校の学習にどのようにつながるのか　～生活科への接続例～

学習指導要領［生活科］の内容への接続例

(6)「**自然や物を使った遊び**」　身近な自然を利用したり、身近にある物を使ったりするなどして遊ぶ活動を通して、遊びや遊びに使う物を工夫してつくることができ、その面白さや自然の不思議さに気付くとともに、みんなと楽しみながら遊びを創り出そうとする。

(8)「**生活や出来事の伝え合い**」　自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を通して、相手のことを想像したり伝えたいことや伝え方を選んだりすることができ、身近な人々と関わることのよさや楽しさが分かるとともに、進んで触れ合い交流しようとする。　【小学校学習指導要領　解説　生活編　Ｐ４１・４６より】

豊かな感性と表現
思考力の芽生え
協同性
社会生活との関わり
言葉による伝え合い

市教育課程［生活科］「なかまなビジョン」を基にした他の人へ伝え合う活動への接続例

【児童同士がこつを教え合うことで、気付きの質が高まる対話例】

【市教育課程 生活科（１年)単元「なつと なかよし」Ｐ15より】

【どのような工夫をしたか教師が問い掛けることで、気付きの質が高まる対話例】

【市教育課程 生活科(１年) 単元「ふゆと なかよし」Ｐ24より】

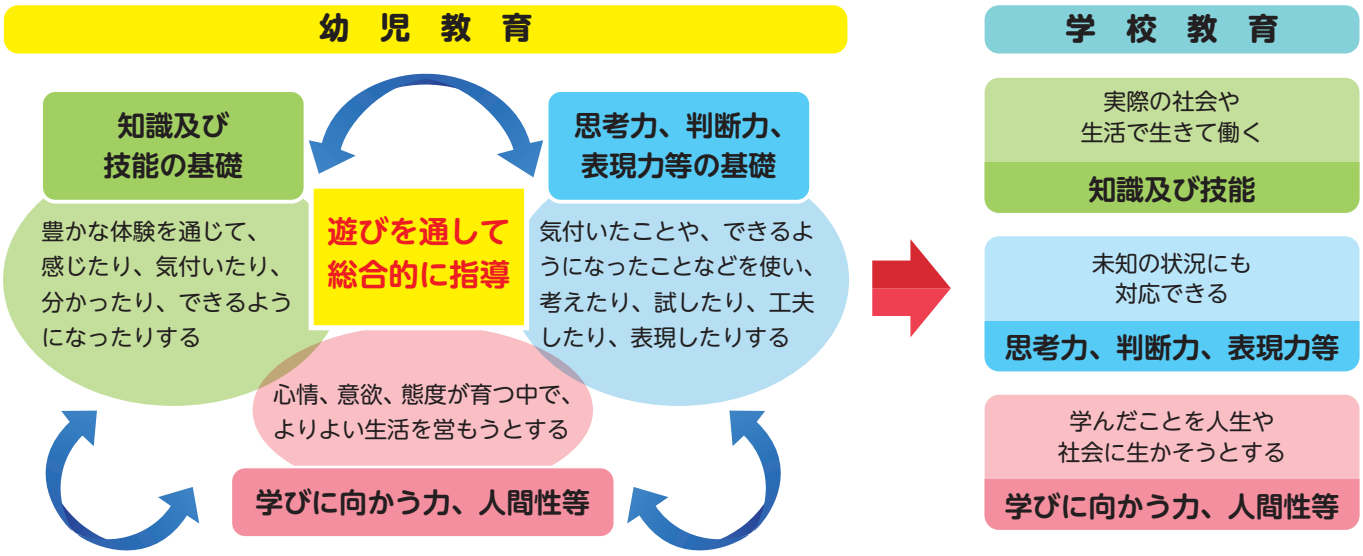
幼保小の円滑な接続を図るためには

幼児教育は、小学校教育の先取りではなく、幼児が主体的に遊び楽しさや面白さを感じる中で、自ら気付いたり考えたりすることなどを大切にしています。この学びが「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」へとつながり、この過程で育まれる資質・能力は、小学校での学習意欲や生活態度の基礎となります。

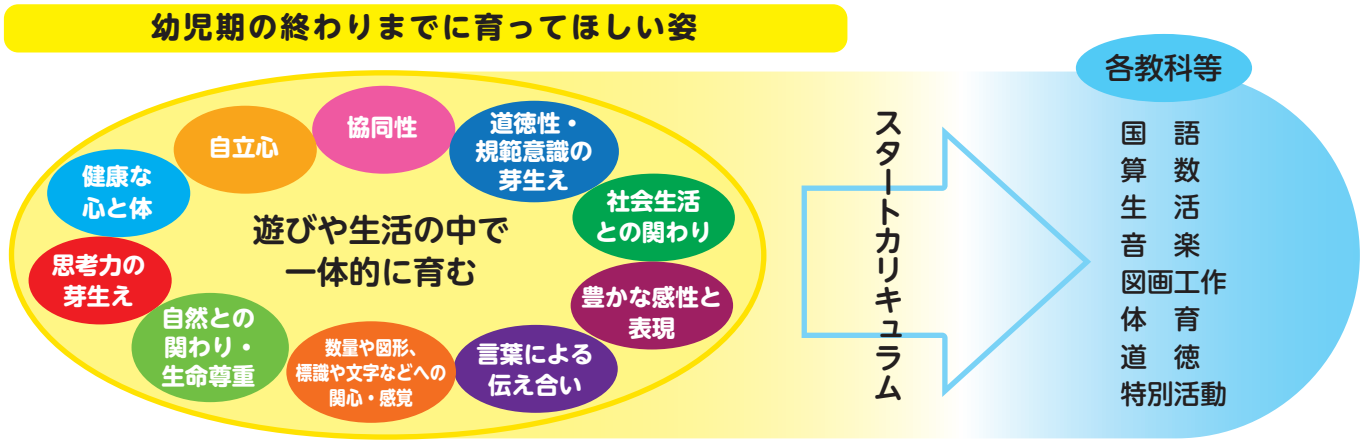
小学校学習指導要領総則には、「入学当初においては、幼児期において自発的な活動としての遊びを通して育まれてきたことが、各教科等における学習に円滑に接続されるよう、生活科を中心に、合科的・関連的な指導や弾力的な時間割の設定など、指導の工夫や指導計画の作成を行うこと」と示されています。

幼保小の教職員が、下図のような資質・能力のつながりを理解し、見通しをもって双方の教育を見直し、教育課程（全体的な計画）やそれに基づく指導計画の改善を図っていくことが望まれます。

【幼児教育と学校教育で目指す資質・能力のつながりのイメージ】



【幼児教育における遊びを通して育まれる学びと、小学校における学習とのつながりのイメージ】



幼児期の終わりまでに育ってほしい姿とは…
到達目標ではなく、幼児教育で育みたい資質・能力が育まれる過程で見られる生活の姿です。

スタートカリキュラムとは…
小学校へ入学した子供が、幼稚園・保育所・認定こども園などの遊びや生活を通した学びと育ちを基礎として、主体的に自己を発揮し、新しい学校生活を創り出していくためのカリキュラムです。

「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」文部科学省ＨＰ内

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引き（初版）

幼保小の架け橋プログラムの実施に向けての手引きの参考資料（初版）

発達や学びをつなぐスタートカリキュラム～スタートカリキュラム導入・実践の手引き～